

インテグラル・エジュケーション研究会
ビジョン・ロジック段階の知性～国際バカロレアをヒントに
第1回 議事録

2015年3月14日（日）渋谷 トモノカイにて

一般的に、成人以降は人間は発達しないといわれています。しかし、発達心理学の最新の研究によって、そうした考えは全くの誤りであることが明らかになっています。また、教育に携わる人間として、他者を成長・探求に向けて啓発していくためには、教育者自身がつねに自己の成長を希求する姿勢を持つことが必須の条件となっています。そうした問題意識から、2015年のインテグラル・エジュケーション研究会は、他者の成長に貢献しようとする我々自身が、ひとりの人間として成熟していくための方法論を研究・探求していきたいと考えています。

そこで、今回の研究会では、成人以降の発達の「見取り図」として、以下の2つのコンセプトをご紹介します。

- ・高度な発達段階としての「ビジョン・ロジック」
- ・成人以降の発達理論の最新の理論としてのダイナミック・スキル理論（カート・フィッシャー）

■ビジョン・ロジックについて

人間の成長は、大まかに「前慣習的段階」（preconventional stage）→「慣習的段階」（conventional stage）→「後慣習的段階」（post-conventional stage）というかたちで展開していくと言われていました。ビジョン・ロジックとは、これまで常識的・平均的な意識のあり方として人々の間に受け入れられてきた「慣習的段階」の意識を含んで超える「後慣習的段階」の発達段階であると言えます。

ケン・ウィルバーは「ビジョン・ロジック」段階の特徴として以下のものを挙げています。

- ・身体と心の統合
- ・「実存的な意識」の確立

「死」や「自由」や「孤独」など、人間の実存的条件を認識しながら生きようになるということ。この点については、実存主義心理学のヴィクトール・フランクル、エーリック・フロム、ロロ・メイらが指摘している。

- ・対極性の統合

ユング心理学にも頻出する概念。意識と無意識、保守と確信、光と闇等の対極的なものを統合する。

- ・Personal と Transpersonal の隣接点

ここでは、強固な自我を作り上げることによって抑圧していたものが意識の中に入り始める。高いレベルと低いレベルの両方の無意識の声を聞くことができるようになる。

- ・メタ認知

自己を対象化して観察する目の確立。「物語」の虚構性の認識。

- ・歴史的な視点

現在は長い歴史の中でのひとつの瞬間に過ぎず、相対的なものでしかないことを認識する。

- ・意識の状態への気づき

自分の中に無数のマスクがあり、多様なコンテキストの中でそれらを付け替えている。また、自己の内部で起きている微妙な意識状態の変動に気付くことができる。

- ・自己観察

人間の認知・認識に対する興味・関心が高まる。人間が心理的な存在であり、リアリティをありのままに観察することはできないという認識を持つ。同じ対象を眺めているようでも、それぞれの観察者が対象を再構築し解釈しているため、異なる見解を持つようになることを理解している。

- ・構造的思考ができる

業界や社会の構造に着目するようになる。刻々と移ろいゆく表層的なエピソードだけに注目するのではなく、それを作り出している深層的な構造に注意を向けるようになる。

- ・複雑性の認識。システム論的な認識。

2015年の研究会では、上記のようなビジョン・ロジック段階の発想法・思考法を参加者の皆さんとともに習得していくことを目指していきます。

■ダイナミック・スキル理論について

ダイナミック・スキル理論が明らかにした成人の発達の特徴として、以下のものが挙げられます。

- ・発達段階が高い人が必ずしも優れたリーダーにはなれるとは限らない。むしろ、つねに高い発達段階から発想するのではなく、シンプルな課題にはシンプルな対応が取れることの方が重要である。

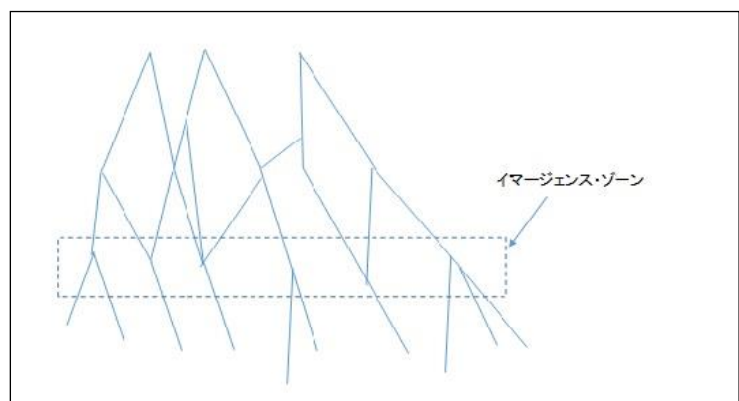
- ・「最適レベル」と「機能的レベル」

個人の能力は、常に関係性により規定される。優れた教師とともに課題に取り組むことで、普段の能力（機能的レベル）を超えて、自分ひとりでは決して発揮できない高いパフォーマンスを示すことができることがある（最適レベル）。

- ・従来の発達理論は、「はしご」や「螺旋」のメタファーによって表現される単線モデルであった。それにたいして、フィッシャーの理論では、**網目状のモデル**を用いる（下の図参照）。

- ・イマーゼンス・ゾーン

断片化して存在していたスキルが、ひとつの意味のある活動へと統合されるときに、それまでとは質的に異なるパフォーマンスを発揮することができるようになる。たとえば、「切る」「描く」「貼る」というバラバラのスキルをある図工作業のために統合的に活用することができるようになると、そこで成長が起こる。



- ・発達は急ぐことなく十分に時間をかけることが肝要である。早く上に行こうとする発想（「英才教育」）に対し、ピアジェは「発達はスローであるべきだ」と主張した。

- ・たとえあるスキルを習得したとしても、少し条件を変えると、全くできなくなることがある。したがって、ひとつのスキルの習得過程では、多様な文脈においてそのスキルを訓練することが大切であ

る。様々な場面に適用できるようになって、初めてそのスキルは安定したものとして確立されることになる。

- ・バックワード・トランジション：後退。人間の能力は上下動するものであり、慣れ親しんでいるはずの領域においても、突然、今までできていたことができなくなることがある。そのようなときには、いったん基礎に戻って、改めて勉強し直す必要がある。

- ・フォーワード・コンソリデーション：「前進への地固め」。上の段階の学習内容の習熟度が 50%くらいになると、下の段階の学習内容の習熟度が 100 パーセントに近くなる。したがって、ある発達段階のスキルを完璧なものにしたければ、それより一段高い段階のスキルを学ぶとよい。

- ・学ぶときには、いろんな領域で同時並行的に探求すること、また、常に仲間と共に関係性の中で学習することが大切である。